二次元ぷち文庫

機鋼天使

アンリミテッドイージス

試し読み版

小説：神楽陽子　表紙イラスト：秋月からす

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『機鋼天使アンリミテッドイージス』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元 EX ノベルズ『機鋼天使ストライクハート』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

機鋼天使
アンリミテッドイージス
神楽陽子
表紙／秋月からす
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

藤崎礼子（ふじさきれいこ）

偉大な大天使である父を持つ純血のエリート天使。機銅天使アンリミテッドイージスに変身して悪魔と戦う。

ベリアル

見た目は少年だが、実は悪魔。人間の女が大好きで、さまざまなところで愛人を作っている。

生徒会室をあとにし、すれ違った教師に下校の挨拶をしてから、彼女は渡り廊下で生憎の曇り空を振り仰いだ。

「天気予報では大丈夫って言ってたけど……わからないものね」

セルリアンブルーのロングヘアを織物のように翻し、一息つく。騒がしい他の生徒たちとは対照的に大人びた少女、藤崎礼子（ふじさきれいこ）は、ごく自然に左手を腰に当て、さながらモデルのごとく廊下を渡った。

後ろから同じ生徒会役員の女生徒たちが追いかけてくる。

「藤崎先輩！　ありがとうございました。やっぱり先輩に相談してよかったです」

「前に似たような件を扱ったことがあったから。お役に立てて何よりだわ」

今日は後輩に、新しくできたクラブへの対応について相談された。先輩役員なら他にも複数いるが、後輩は困ったことがあれば大抵、生徒会副会長である藤崎礼子のところに助言を求めてくる。

「それじゃあわたくしは失礼するわね。あなたたちも気をつけてお帰りなさい」

「はっ、はい！　お疲れ様です！」

後輩は一列に頭をさげ、副会長の背中を羨望のまなざしで見送った。

同性でも惚れ惚れするような気品を纏（まと）い、手櫛（てぐし）を入れるだけでも実に絵になる副会長を知らない者は学内にいない。人通りの多いところでは、ふたりにひとりは振り向く強烈（きょうれつ）な

存在感を放ち、男子からも女子からも憧れの的である。
キリッとした表情で堂々と胸を張り、背筋を伸ばして歩く姿は、誰の目にも明らかな優等生のオーラに満ち溢れている。
礼子本人もまた、心の中ではそれを実感していた。
（ふふっ、才能を持ちすぎた自分が恐ろしいわ）
幼い頃から天才、秀才と称され、実際に期待に応えるだけの実績も挙げてきた。学業成績には非の打ちどころがなく、運動神経も抜群で、今も多数のクラブから勧誘が殺到している。自分に足りないものなどない。
グラウンドに差しかかれば、部活中の男子に次々と声をかけられる。
「藤崎さん、お帰りですか？　お気をつけて！」
「あなたたちも怪我だけはしないようにね。今度の試合、吉報を楽しみにしてますわ」
今朝も通算何通目かのラブレターが机に入っており、上機嫌だ。
（帰ったら、お付き合いはお断りする返事を書かないと……）
これ以上はない充実した学園での日々。学校では何もかもが上手くいく。
だが、そんな礼子にもひとつだけ絶対の不満があった。
ＴＲＲＲＲＲ！
普段はマナー設定にしてあるはずの携帯電話が音で着信を報せる。

（――きたわ！　このチャンス、逃すものですか！）

ハッとして礼子は踵を返し、校舎内の適当な物陰に飛び込むように隠れた。そこで携帯電話を開き、慣れた指の動きでキーワードを入力する。

「担当区域外だから直感できないのよね、悪魔の暴れる気配……システムコネクト、UNLIMITED……『A、E、G、I、S』イグニション！」

礼子の姿が映像のようにふっと消えた。

学園地下に隠された「機鋼天使」専用のドックエリア、そこへと転送してきた礼子は最初に無数のセンサーに迎えられる。

身体はふわりと重力から解放され、泳ぐように髪が扇に広がった。制服がひとりでに剥がれ、ブラジャーとショーツは、ひとり恥じらいながらも少女が自分で解く。

爪先から上に向かってスキャニングが始まった。

『コンディション達成率九十七パーセント。出撃可能です』

「当然よ、早くして」

『了解。イクイップウィザードを開きます』

薄暗かったドックエリアの中が緑色の光を集め、両手で胸元を隠す少女の裸体を浮かび上がらせる。その肌は瞬く間に、組み合わさっていく六角形のスキンに覆われ、ビスチェ

に近い形のボディスーツが形成された。
脚には膝丈のレッグアーマーを装着し、脹脛の位置にスラスターを持ってくる。
同時に、礼子が胸からのけた両手には指抜きのグローブが現れ、四肢の動きを妨げない作りで防御力を高めた。
『ＳＹＳＴＥＭ、ＡＬＬ　ＧＲＥＥＮ！』
『ＵＮＬＩＭＩＴＥＤ　ＡＥＧＩＳ、ＳＴＡＮＤ　ＢＹ！』
目の高さに透明のバイザーが降りてくる。
「藤崎礼子、アンリミテッドイージス……作戦行動を開始するわ！」
科学力で武装した少女は重力を取り戻すと、高さ十メートルはある頭上のゲートに向かって跳び上がり、両脚のバーニアを一度に噴かせた。

学園のプールが突然、中央から真っぷたつに割れてしまう。部活中だった男子水泳部員は慌ててプールサイドに駆け上がった。
「なんだなんだ、またかよ！」
「警告とかしないのか？　練習中に迷惑だな！」
蹴り上げるようにしぶきを上げて紅の美少女天使が姿を現す。
「スクランダークロォース！」

一秒を埋める差でもうひとつのシルエットが、大鷲のごとく翼を左右に広げ、彼女の背中とドッキングした。アンリミテッドイージスの主力武装にして航空手段でもある大型の支援機「ソロネ」である。

両翼にマウントされた高エネルギービームライフルを右手に、シールドを左手に取ってアンリミテッドイージスは出撃の轟音を鳴らす。

ドオンッ！

水泳部員が半ば呆れていることに礼子はまったく気付いていなかった。

（わたくしがあのアンリミテッドイージスと知ったら、みんなどんなに驚くかしら）

正体を明かせないことを勿体なく思いながら現場に急ぐ。

☆

天使とは、神から独立した人間を見守る立場にあった。あくまで見守るだけであって通常は人間社会への干渉は許されていない。

しかし天使が人間界への干渉を許される、むしろ推奨される場合がある。すなわち悪魔が人間界に現れた時だ。

そこで人間界に派遣された天使は、悪魔を発見次第追い返す任務を与えられており、迅速に対応できるよう、普段は人間社会に溶け込んで生活しているのである。

偉大な大天使を父に持つ礼子は、誰よりもこの務めに燃えており、気持ちに相応の成果

を挙げていた。天使たちの間では将来を有望視されてもいる。ところが天才肌でプライドの高い礼子には、どうしても我慢のならないことがあったのだ。

自分こそが機鋼天使の模範であることを証明したい。

（これくらいで満足なんかしてられないわ）

理由はただひとつライバルの存在だ。隣接区を担当する同世代の機鋼天使「ストライクハート」の戦績をどうしても破れず、礼子のイージスがナンバーワンの座に君臨することはなかった。

ストライクハートは「エンジェルハーフ」、本来は許されない天使と人間との混血児だというのに。これでは純血天使の面目も丸潰れだ。

おまけにストライクハートのほうが格好いいだのと騒がれては。

（あんなの派手なだけよ！　戦闘はもっとテクニカルにするべきだわ）

ライバル心は怒気を呼び、少々ナーバスな礼子を逆撫でする。

しかしチャンスは巡ってきた。なんとストライクハートが大失敗をして、先月から謹慎処分を受けており、彼女が担当する地区をしばらくはアンリミテッドイージスが受け持つことになったのである。

ここでストライクハート以上の活躍をすれば。

（今に見てなさい、ストライクハート！）

アンリミテッドイージスはビームライフルのグリップを握り締めて、ソロネのバーニアを全開にし、悪魔の出現ポイントへの到着を急いだ。

間もなく現場上空へとやってくる。駅近くの公園では、三匹のガーゴイルが、人々を相手に妙な説法を続けていた。

『終末の時は近づいておるのだよ、諸君。神はすべての人間を救うというが、神への祈りだけで空腹が満たされたことはあるか？』

『法と秩序による偽りだらけの世界に終止符を打つのだ！　さあ、諸君らも恐れずに我らのカオスを受け入れよ、さすれば世紀末を生き抜くこともできようぞ』

相変わらず悪魔のやることには悩まされる。

（二十一世紀になってまだ十年も経ってないのに、世紀末って言われても……）

しかしそれ以上に理解に苦しむのは、このような説法でも寄付が集まる現実だ。ガーゴイルの足元には結構な額が山を成しており、聴衆も感心気味に頷く。

悪魔といっても人に危害を加える例は極めて稀だった、そのせいか人々はガーゴイルを前にしても怯えはせず、むしろ風変わりな彼らに興味津々といった雰囲気である。

それでも悪魔を放っておくわけにはいかない。

アンリミテッドイージスは真上に銃口を向け、ビームの一閃で曇天を貫いた。

「そこまでになさい！　人間界への干渉は原則禁止よ、ガーゴイル！」

「うぇお！　やだっ、くさぃ――んッんぶぅう⁉」
「はいはい。お姉ちゃん、まずはニオイと味に慣れようね」
凹凸を合わせるようにベリアルが、礼子の綻んだ唇と男根を連結させる。ゴム塊のような牡肉は、口に入れるには太すぎて、どうしても舌と接触した。
「ぉむうっ！　お、押さなひでっあら、ぐ、ッんぐ！」
ベリアルに頭を押さえられ、より深く咥えさせられる。すらりとした顔立ちが、歪んで頬を膨らませ、艶やかな唇はひしゃげて鼻を押し上げた。
（く……苦しい……ッ！）
満足に息ができないために自然と吸い込みが強くなってしまう。自分にとっては無味の唾液が、次第に塩辛くなってきて、生理的な嫌悪を催す生臭さが、排泄器官であることを強烈に思わせる。
「こんぁ、はあ、きたはぃモノ……んもっ、ぉぐう」
口で感じさせられるペニスの脈動も気味が悪い。汚さのせいで歯を鋭く立てられず、ぶよぶよとした包皮にも阻まれた。
美少女天使の唇に肉杭を打ち込んだ男がゼエ、ゼエと息を乱す。
「すごい、そっ……そんなに吸われたら！」
脚をガクガクとさせ、同じだけの振動を男根にも伝わらせる。ペニスは頬張る前よりも

えっちシーン試し読み ここからスタート！

勃起を増強し、いっそう硬くなった。
「んあっちゅ、むぐ！　ど……どぉなっへうの？　ぬ……抜ひなはいったら」
咥えたまま喋ることで、舌がニュルニュルとうねって包茎を満遍なく舐めまわす。
ヌチュッ！　ヂュル、ヂュルル……チュパ！　チュパ、チュパッ！
そのつもりがなくとも、口淫には十分な量の唾液が吸い音と粘音を奏で、公共の場の空気を一変させた。
「ちょっと……あの子、本当に始めちゃったわよ。どうかしてるわ」
「うわっ、あんなにむしゃぶりついて……」
猥褻の自覚が淫らな気分を従え、羞恥で熱化した脳裏に忍び込んでくる。
右脚の付け根に寄せられた股布を戻すことも忘れていた。
（みんなの前で、こ……こんなやらしいコト……してるなんて）
秘壺が小水と変わらない量の愛蜜を分泌し、碧い性毛を恥丘にへばりつかせる。茹で卵のような色艶の太腿にも流れていく。
無性に乳頭がむず痒く、ロープで縛られてさえいなければ、すぐにも自分で柔房を掴み取りたいくらいだ。人前であることがだんだん当たり前になって、観衆の反応に何かしらの期待を抱くようにもなる。
「んぉっぢゅ、もご……おっむ、はっあむ！」

上下二枚の唇がズルズルと肉茎を前後し始めた。相手の陰毛に鼻を近づけては、朱唇を引きずって戻り、回数を重ねるごとに慣れて捻りも加える。

（わ……わたくし、何をして……？）

何も命令されたわけではないし、したくもない。そのはずなのに、一度始まったマウスピストンを途中で止めることができず、口蜜で表面のふやけた肉棒をヂュルヂュルと咀嚼（そしゃく）してしまう。ベリアルの手が離れてもやめられなかった。

「はあっぐ、んむ！　ん、んんん……ッ、んぷはあ！　はあっ、はぁ……あ」

ようやく口から肉茎を外せても、犬のように舌を垂らし、ヌラつく剛直にれろれろと這わせる。自分の唾液臭の染みついた腐肉に小鼻を擦りつけもする。

（やだ……ニオイで変になっちゃいそう……）

切れ長の瞳はうっとりとして、男の股間を熱く見詰め、舌は唇から食み出した。

「んあっぷ、はぁ……あっむう」

口蜜で包皮をジュクジュクに仕上げたら、牡のにおいが強くなるところを探し、そこに舌先を差し込む。皆が見守る中、両腕を括られっ放しの美少女天使は、舌だけでペニスの皮剥きを見事にこなしてみせた。

黒ずんだ瘤状の物体が飛び出してくる。それが亀頭で、男性のもっとも弱い部分であることなど知りもしない礼子は、そこも丁寧に舐めあげた。

「はあ、あっふぁ、んく……なんなの？　コレ……んふ、あ、っはあ」
湿った摩擦で腫れた亀頭を直撃し、相手の背筋を伸び上がらせる。
「くうッ！　ハア、す、すごすぎる！　きっ気持ちよすぎて！」
もうひとりはまだ周囲を気にしていたものの、ベリアルに誘導されてやってくる。
「えっと、お……俺は？」
「突っ立ってないで、キミもおいでよ。お姉ちゃんは欲張りなんだ」
左から加わった二本目はすでに包皮が半分剥けて、鈴口に玉の蜜を滲ませていた。
どちらも傘が皮に突っ張る包茎で、噎せるにおいが少女の鼻先に充満する。ところが先ほどまでの嫌悪感はなく、男根の味を含んだ生唾をごくりと呑み下し、イージスはアーンと唇を大きく拡げた。
両方の頭部を一度に甘く噛み、隙間で舌をのたくらせる。
「はあっぁぷ！　んぐ……んもぉ、はむ！　おご……んぢゅぅう」
「そうそう、手を使わずにおくちだけでするんだよ。ちゃんと最後まで皮も剥いて」
考えるより先にベリアルの、暗示めいた指示に従って薄皮を啄ばむ。
それをずり降ろして亀頭を雁首まで取り出したら、窪みを小刻みに穿(うが)って、男性二名を同時に苦悶させた。
「ちっ、ちょっと待ってくれ！　ハア、そんなに激しくされたら……」

壺口から湧き立つ白濁が、肉唇ごと出入りする太幹をヌラつかせ、摩擦をそのまま猥音を変え。体感的にも、物理的な圧迫感が恥骨の下を前後するのだ。

角のついた亀頭冠がゴリゴリと膣筒を穿り抜く。

「ひはぁふ！　んあぁ！　らめっ……め、捲れひゃう！」

呂律もまわらないイージスはロングヘアを振り乱し、快楽から逃れたい一心で、両手を括るロープをギリギリと引っ張った。だが逆に固結びになってしまって、肩と肘が余計に突っ張り、ひたすら疲弊させられる。

少年がピストンのペースをゆっくりと落とした。

「どう？　お姉ちゃん、僕のオチンチン。前のふたりと比べてさ？」

卑猥な問いかけの内容を思案する余裕などない。

「おっ、おっきぃの！　すごく……んあはぁ！　っぁあ！」

思ったことをそのまま口にし、続きとばかりに悶え狂う。そのつもりが、痺れが徐々に弱くなり、男根は亀頭が外れそうなところでぴたりと静止した。

「……ぁはあ？　ひはあ、くうっ、う……んふぅう！」

刺激のこないじれったさが肉壺に掻痒感を渦巻かせる。肉体はすでに引き返せない段階まで興奮しており、果てたい、という欲求は衝動となって理性に亀裂を走らせた。

（おかしくなっちゃう……アソコ、アソコが変なの……！）

えっちシーン試し読み ここからスタート！

無意識に細身をくねらせ、先の小さく尖った双乳を弾ませる。ベリアルに掴まれた美尻を敏感そうに、ぷるぷるっと震わせ、心のどこかで続きを望む。

歯の裏に残った牡汁を舌でかきだし、汗だく肉体をレオタードもろともヌメ光らせ、美少女天使は肉杭が入りそうで入らない極限状態に煩悶した。

「だ……だめっ、は……早く抜いて」

「いいの？　やっぱり痛いのかな。痛くするのは僕の趣味じゃないからね、お姉ちゃんがどうしてもっていうんなら……」

「違ぅの！　……あ、だ、だからそうじゃなくて……」

外されそうになるや焦った言葉が飛び出す。

「えへへ、やっぱりね。本当はもっとゴリゴリして欲しいんでしょ？　いいよ、僕は素直じゃない女の子のほうが好みなんだ」

肉厚の剛直が再び淫肉にズブズブと沈み始めた。甘い悦感が閃いて、灼熱のヴァギナが蕩けてしまいそうになる。

「んあ……あっ！　んふぁはあああ！」

淫らな酔いのせいで平衡感覚は失われ、女壺を進む肉柱にだけ引力を感じた。女の蜜で太腿を淫靡に光らせ、結合部から垂直に滴り落ちる水滴の数も多くなる。

イージスは見るも淫猥な、肉悦に堕した笑みを浮かべ、瞳はまなじりを緩めてとろんと

虚空を彷徨(さまよ)っていた。白日の下に晒された美少女天使のアクメ顔に、観衆が一歩と言わず二歩も三歩もあとずさり、立ち去る者も出始める。
「さっきから……ほんと、な……なんだっていうんだ？」
「知らないわよ、も、もう行きましょう？」
残ったのは大半が男性で、股間を明らかに膨らませている。
傍に立たされたままの二名は、再び膨張させた先端に我慢汁を溜め、脂ぎった視線で美少女の蠱惑的なよがり姿を見ていた。
離れた群集の間からもゴクリと嚥下の音が聞こえてくる。
「そーだ、その気があるなら他の人もきてよ。数は多いほうがいいからね」
「ち、ちょっと……んはあッ！　はあ……ひはぁ、待って……」
男たちは次々と殺到し、雄々しい逸物を競って取り出した。視界を男性の下半身で埋め尽くされる。
「ほらお姉ちゃん、練習の続き頑張って！　でないとオマ〇コしてあげないよ？」
「そんな――っあぐぅむ⁉」
少女の真意を確かめもせず、最初の男が肉根を唇に押し込んでくる。それは見事な口枷となって、加速する呼吸を難しくし、より強い吸い込みを生理的に促された。
「んもぉご！　ひぁぶ、んぐ！　はあっ、あっおぉぐ」

「もっと唇で擦るカンジ？　そうそう！　はあ、今からお姉ちゃんに僕のしゃぶらせるの楽しみになってきたよ……じゃあ、僕も！」

肉襞を雁首に絡みつかせる肥大なペニスが、膣筒を上まわる太さを抜き挿しし、体内に悦痺れを直撃させる。

「んぷっ……あはぁああん！　はぁ、はあ……んぐぅうッ！」

涎まみれの朱唇から男根が外れても、別の数本が一度に詰め寄せ、また頬が膨らむまで咥えさせられる。それぞれ挿入の角度が異なり、口の中を転がるかのようだ。

舌でねっとりと雁首を捕らえてチュパチュパと吸う。

「やばいっ、また出る……でっ出るぞ！」

「俺もだめだ、見てるだけで、ハアッ、我慢できねえ！」

美少女天使の舌技に屈し、男どもは順々に肉根から異汁を噴かせた。拍動ごとに肉茎が暴れ、吸いつく唇を捲るように外れていく。

ビュルンッ！　ビュルッ、ビュル！　ビュルビュルビュル！

「ふぁぐぅう⁉　ン……っぷはあ、はあ……？」

息を継ぐ間もなく顔面にも汚濁をばらまかれ、鼻筋と頬にどろりと垂らす。

残り汁は粘性の糸を投げるように伸ばし、赤いレオタードに線を引いた。自分の吐息が青臭い腐臭をにおわせ、呼吸するだけでも犯される。

口の底にも白濁が溜まって、生理的に咽が嚥下を拒む苦さで口内を満たし、礼子に男性の味を反芻させる。
「はぁ、んはあ……く、くるひぃ……息、はあっ、でひなくって……」
「休んでちゃだめだめ。さぁお姉ちゃん、次いこう！」
「だから待って――んぶぅうッ！」
真横から挿すような急角度で次の一本を突っ込まれた。順番を待てない男は、美少女天使のロングヘアに勃起を通してみたり、蒸れたボディスーツに手を這わせたり。
唐突にまったく意識になかった方向から、目の前に男根が飛び込んできて、煮えた汚濁をしぶかせる。
ビュクン！　ビュクビュクッ、ビュクン、ビュクン、ビュクン！
「ぁぷぅう？　ンぐっ、らめ……あむぢゅう！」
唇に嵌められた肉杭が硬くて顔を逃がせず、好き放題に汚される。白濁汁は顎から垂れ幕となって滴り、美乳の曲線をどろりと覆った。
乳房は麓を押し揉まれ、薄生地に浮かぶ小突起は摘んで引っ張られる。セックスの最中であらゆる刺激に敏感な肉体は、発育のよさを複数の手に確かめられ、ベリアルにはよく締まる秘壺を堪能された。
「いいよ、お姉ちゃん！　もっと締めつけて……そっそうそう！」

「んあっぷ、はむ……おあんこ壊れひゃうぶ！」
汁をかき混ぜられる音と、粘膜の擦れる音が頭の中を混濁させる。摩擦のたびに熱痺が快楽神経をのたうたせ、続けざまの快楽にどうにかなってしまいそうだ。
自分が何をしているのか理解できなくなって、考えようとしても、子宮孔へのひと突きで思考は消し飛ぶ。
（だめ……もう、カラダが……気持ちよくなっちゃって……）
自分では加速的に昂る肉体を止められない。
ベリアルの指が食い込むお尻は赤く染まって、汗みどろの太腿を病的に震わせ、結合部は無限に淫らな涎を垂らした。
グチュッ！　グチャッ、グチャ！　……グチャッズチャッヌチュッグチャッ！
子宮を打つ回数が多くなり、電気を流されたかのように四肢が痺れる。極限状態の礼子は、ぐちゃぐちゃの脳裏に差し込んだ白い光にふらふらと誘われ、高まる官能に引きずり込まれようとしていた。
「んあぐっ！　あむ、んちゅっぱ！　はぁ、はあ……あむっちゅ！」
剛直に吸いつかせた唇は、酸素が足りないからこそ苛烈なバキュームで扱きあげ、頬の中では舌が亀頭を丁寧至極に練磨する。味覚も嗅覚も麻痺してしまって、働かず、ペニスをしゃぶる猥褻の気分ばかりが盛り上がってしまう。

呼吸も鼓動も一気にペースをはね上げて、性感帯は血流量を増し、一回の刺激から感覚する快感が増幅した。

「らめっ、んぐぅ……イぐっ、もぉ……ひっぢゅるぅう！」

「すごいよお姉ちゃん！　はあ、さっきまで処女だったのに、いきなりオチンチンでイクんだ？　もう、はあっエッチだなあ！」

ベリアルが尻布を掴み上げ、肉杭をいっそう深く打ち込んでくる。拡げ擦られる肉壺で法悦が膨れ上がり、美少女天使の肉体を淫猥な痺れの虜にする。イージスは形の美しい双乳を、スペルマでヌルヌルに彩りながら、女の臨界に達した。

「ひあぷ！　あ……あぁあああ」

もうひと捻りさせようとした腰が飛翔感に打ち上げられる。結合部以外は重力から解き放たれて、頭の中が真っ白に染まり、甘美な陶酔感が到来した。

汚れた唇が口枷を舌で押しのけ、ソプラノボイスの嬌声を張り上げる。

「イクっ！　いっ、イクイクぅうううぅぅうううううううううう――――――！」

蕩けるような恍惚感。身体じゅうがとろとろになるかのようで、心地よすぎて、ありのままの快楽を笑みにも浮かべてしまう。焦点の外れた瞳は艶で満たされ、両端から白濁を零す唇は、紐が切れたかのように締まらなかった。

膣筒がキュウッと収斂し、少年の巨木を根元から熱烈に食い締める。

「お姉ちゃん、僕も出るよ！　……あっ、あっ、あっ！」
肉の芯を締めつけられるのがたまらないらしく、ベリアルはこれまでにない弱い呻きを繰り返し、滾った欲望を少女の子宮に注ぎ込んだ。
ペニスがさらに大きく、熱くなったかのように感じられる。
「あ……あっ、んふぁあ……！」
灼熱のスペルマはお腹が突っ張るまで流れ込んで、重たくさえあった。
陵辱の限りを尽くされるのは、今の自分にとって刺激的でいやらしく、肉棒の熱硬さを秘壺で満喫しながら、礼子は尿の小道を決壊させてしまう。
ブシュウウウウウウウウウウウウッ！
太肉に塞がれていた小水の出口が勢いよく潮を噴いた。
原始的な開放感に陶然として、汚濁にまみれた艶笑をより深め、自ら望んで残りの汁も噴射させる。
「すごぉい……き、気持ちひぃのお……あはぁあ！」
麗しい美少女にはあらぬ痴態に、他の男たちも下半身から精を吐き出す。
ドビュッ！　ビュルビュルビュル！　ドクン！　ビュクッ、ビュクビュクビュク！
白弾はばらばらに飛び交って、アンリミテッドイージスのうら若い肉体を求めるように粘りついた。両腕を後ろに括られているため、真正面で受け止めさせられる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/